

(要約版)

大学生の喫煙・飲酒が気分状態に与える影響の解明

—対人関係を媒介要因として—

助成研究者 入江智也 (北翔大学北方圏学術情報センター)

目 的

大学生における過度の喫煙および飲酒は、学業不振、抑うつや不安感に影響を与えることが指摘されている (たとえば Schry & White, 2013)。一方、喫煙および飲酒の開始や維持には、親密な人の属性や他者との接触頻度といった社会的要因が関わっていることが明らかにされており、コミュニケーションの手段ともなることが示されている (笠巻, 2012)。

このように、適度な喫煙および飲酒は、社会的な場面では対人関係構築や維持といった利点があると考えられるが、個人が有する対人関係を含めた、喫煙および飲酒、気分状態、対人関係の3者関係に着目した研究はこれまで行われていない。そこで本研究では、研究1として、喫煙および飲酒と対人関係が、不快気分および生活満足感に及ぼす影響を明らかにする。研究2として、社会的ネットワーク分析を用いて、それらのネットワーク構造が喫煙者と飲酒者の気分状態に及ぼす影響について検討する。

方法 (研究1) 喫煙・飲酒と対人関係が不快気分と生活満足感に及ぼす影響

下記に示す調査票を20歳以上の大学生380名に対して配布した。調査に回答した189名のうち、回答に不備のある12名を除外した177名 (男性105名, 女性72名, 平均年齢 20.56 ± 0.88 歳) を解析対象とした。解析は、喫煙と飲酒の有無、友人関係の程度の高低を独立変数、生活満足感を従属変数、とした2要因分散分析を行った。なお友人関係の程度の高低では、平均値(77点)以上を高群、未満を低群とした。

調査票 1)喫煙・飲酒状況: 過去1週間の飲酒量および過去1日の喫煙本数を尋ねた。本研究では、喫煙者を「1日に10本以上の喫煙がある者」、飲酒者を「1週間に2度以上の飲酒頻度である者」と操作的に定義する。2)抑うつ・不安感: POMS2短縮版(横山, 2015)を用いた。3)生活満足度: 人生に対する満足度尺度(SWLS; 角野, 1994)を用いた。4)対人関係: 友人関係尺度(小塩, 1998)を用いた。

結果 (研究1)

2要因分散分析の結果、生活満足度に対し、友人関係の程度の高低の主効果が有意であった ($F(1, 169) = 6.04, p = .04, \eta^2 = .03$)。さらに、喫煙の有無と友人関係の程度の高低の交互作用が有意傾向であった ($F(1, 169) = 6.97, p = .07, \eta^2 = .02$)。喫煙・飲酒の有無の主効果および、飲酒の有無と友人関係の程度の高低の交互作用は有意ではなかった。単

純主効果の検定から、喫煙していない者では友人関係の程度の高低の単純主効果は認められないが、喫煙している者では友人関係の程度の高低の単純主効果が認められた ($F(1, 171) = 9.29, p = .002, \eta^2 = .05$)。

方法（研究 2） 喫煙・飲酒と社会的ネットワークが不快気分と生活満足感に及ぼす影響

研究 1 で使用した調査材料 1)~3)に加え、対象者の社会的ネットワークを尋ねるネームジェネレーター方式を用いた社会的ネットワーク調査票に回答した大学生および大学院生 34 名（男性 11 名，女性 23 名，平均年齢 22.91 ± 5.33 歳）を研究協力者とした。解析は、喫煙および飲酒の有無を独立変数，POMS の TMD および SWLS 総合得点を従属変数，ネットワーク密度および媒介中心性を媒介変数とした媒介分析を実施した。なお，ネットワーク密度は紐帯のとり得る値の最大値（10）で除した値を標準化された値として用いた（安田，1997）。媒介中心性はとり得る値の最大値 $((n-1)(n-2)/2)$ で除した値を標準化された値として用いた（鈴木，2009）。

結果（研究 2）

媒介分析の結果，喫煙が生活満足感に与える影響に対して，ネットワーク密度の間接効果が有意であった（95%CI [0.08, 6.78]）。しかしながら，媒介中心性の間接効果は認められなかった。飲酒において，ネットワーク密度，媒介中心性ともに間接効果は認められなかった。さらに，不快気分について，喫煙・飲酒ともにネットワーク密度および媒介中心性の間接効果は認められなかった。

考察および結論

本研究の目的は，研究 1 として，喫煙および飲酒と対人関係が，不快気分および生活満足感に及ぼす影響を明らかにし，研究 2 として，社会的ネットワーク分析を用いて，それらのネットワーク構造が喫煙者と飲酒者の気分状態に及ぼす影響について検討することであった。その結果，喫煙においてのみ，研究 1 では対人関係の交互作用，研究 2 ではネットワーク密度の間接効果が認められた。この結果は，喫煙行動と飲酒行動が生じる環境の差異が影響していると考えられる。大学生における飲酒は，親しい友人とのコミュニケーションや付き合いのために生じることが多いことが示されている（笠巻，2012）。一方，喫煙は日常的に生じる行動であり，喫煙スペースにおいては面識のない他者との実際の交流が生じる環境となり得ることを示唆している（小林・津田，2008）。

つまり，喫煙は対人関係が良好である場合に生活満足感の向上に関連する可能性があること，さらに喫煙はネットワーク密度を拡大する効果があり，さらにネットワーク密度の拡大は生活満足度を向上させることが明らかとなった。